

# テーマ「馬と水虎（エンコ）の話」

ジャンル：民話

むかし むかし 今の船渡橋（ふなわたばし）の近くに、百姓の五郎兵衛という人がすんでいたそうです。五郎兵衛は、馬をたいへんよくかわいがり、朝、昼、晩と馬の体をはけですいてやったり、早く起きて新しい草を刈って食べさせたり、夏には、近くの井関川に馬を入れて、よく洗ってやったり、それはそれはよく世話をしていました。それで五郎兵衛にとって馬は家族の一人ぐらいに思って育てていました。

それもそのはず、そのころは、馬といえば家の次ぐらいの財産でありました。米作り、畑作りの耕しから、物運びと、馬なくては百姓はできませんでした。人間にとって一番苦しい仕事を馬がしてくれるからです。五郎兵衛もきっとそう思ったにちがいありません。馬をととても大事にしていたのです。

ところが、あまり五郎兵衛が、馬をよくかわいがるのをつねひごろ、ねたんでいたものがいました。それは、井関川のせきのすぐ橋の下に住んでいるカッパです。

「よくまあ、あんなに かわいがるもんだ ひとついたずらをしてやるかな。」

と思ったカッパは、そーと川の近くにある馬小屋に入りました。ちょうどいいことに五郎兵衛はいません。

「よし、いまだー。」

と思ったカッパは、馬をぐいぐい引っぱって川の中にひきずりこもうとしました。馬は、はいるまいと足をふんばってがんばるし、いたずら好きのこのエンコは、川の中へ馬をいれたら“わしの天下”と思ってそれこそ一生けんめいがんばりました。

ところが、五郎兵衛がひごろよく飼っているのでなかなかの力持ち、ずいぶんひっぱてみたが、馬の方が力が強くカッパはあべこべに、馬小屋へひきずりこまれてしまいました。ちょうどそのとき、五郎兵衛が帰って来ました。カッパは、いち早く馬おけのかげにかくれました。しかし、五郎兵衛はすぐに気づき

「やいカッパ、よくも 馬小屋までやって来たな、このいたずらものめ。」

と、えり首をとっかまえてやっつけようとした。エンコはこうなっては仕方がない。五郎兵衛の前に両手をついてあやまりました。けれども、五郎兵衛はしょうちしません。そこで、カッパは泣き泣き、

「これから先 三里以内において 決して人や飼っている動物にいたずらしません。また川から出て来ません。どうぞかんべんしてのちだけはお助けください。」

と言ったそうです。その後、井関川の西条のほとりに 誓いの石を立てて去っていきました。それが、今ある西条のじょう様の横にある水虎（エンコ）石と馬石です。

今、エンコ石と馬石の西どなりには仏様を、東どなりには神様がまつてあり、それから、馬を飼っている人の守り神となりました。

このごろは、馬を持っている人がありませんが、この近くの人々は、信仰にあつく、今なお線香の煙はたえません。

東条の西村スーパー前にも“カッパ”の石といわれている岩がありますが、とにかく阿知須のこのあたりには、昔、カッパがすんでいたそうです。

出典：創作民話「あじす 昔ばなし」  
昭和58年9月1日発行  
磯村千代子 発行・編集



西条地区の水虎石と馬石

